

東京交響楽団
楽団員が語る
名曲のツボ
Vol.63



©N. Ikegami

チェロ フォアシューパー

川井 真由美

Mayumi Kawai



上：ドヴォルザークはプラハのヴィシェフラド民族墓地に眠っています。川井さんは留学中にお墓参りをしたそうです。

下：チェロ・パート譜の第1楽章冒頭。7人の指揮者の弓順が書き込まれています。4月の「名曲全集」はどんな弓順になるでしょう？

撮影／川井真由美(2枚とも)

Symphony No.9 “From the New World” Antonín Dvořák

ドヴォルザーク作曲 交響曲 第9番「新世界より」

美しいメロディの宝庫、裏メロもおいしいチェロ
炎のコバケンのメリハリある「新世界より」

「新世界より」は、「第九」の次に演奏回数が多い交響曲で、東響では毎年「ユーイヤーコンサート」で演奏しています。弾くたびに思うのは、メロディの美しさ。ドヴォルザークの円熟の筆のすこさを感じます。

そんな美しいメロディの宝庫、「新世界より」の最初のメロディを弾くのがチェロです。たった4小節ですが、上げ弓、下げ弓、どちらから始めるのか、また、1小節をスラーでつなげるのか、はたまた切るのは、曲の冒頭から指揮者それぞれの解釈があらわれます。

美しいメロディといえば第2楽章でしよう。イングリッシュホルンのメロディ、私の住む地域では夕方5時になると流れますが、このメロディが1フレーズ終わったあと、チェロが少々気をつかう音が出てきます。ここは弦楽器だけで演奏するのですが、2つめの音のリズムが第1ヴァイオリンとチェロとで微妙に違い、そのアンサンブルが難しいのです。しかもPPPと指示されているので、弱く柔らかい響きを出そうと、D線の高いポジションで音を取るため、美しい音を出せるかどうか、こ

こはいつもドキドキします。

そのあと第2楽章の中ほどで、クラリネットとオーボエのメロディにコントラバスがピツイカートを奏でるところは、私がこの交響曲で一番好きな箇所です。クレッシェンドで広がる響きがいいですね。チェロは休みなので、いつも聴き入っています。

第2楽章のあのメロディは、楽章最後にヴァイオリン、チェロのソロで登場します。このソロ、皆さんは心地よく聴いていらつしやると思いますが、チェロにとっては最大の難所。首席代行として何度か弾きましたが、私にとって、オーケストラ曲中のソロのうち最も弾きにくく、最も緊張するソロなんです。たった2小節ですが、静まり返った中、柔らかな音色で弾かねばならず、さらに第1ヴァイオリンにハモの音程感が難しい。このソロに比べれば、協奏曲でソロを弾く方がずっと気が楽です。そのくらい緊張します。この感覚、他のオーケストラの首席チェロの方も同意見でした。ですが東響ソロ首席の伊藤くんに話すと「え、そうですか？」と。彼にとっては余裕の

ようです(笑)。

演奏していて最も気持ちがいい箇所は、第4楽章、シンバルが鳴ったあとクラリネットが静かにメロディを奏でますが、その合いの手をチェロが入れるところです。「新世界より」でチェロは、メロディはもちろん、このように素敵な裏メロも多いんですよ。

4月に指揮するコバケンさん(小林研一郎氏の愛称)は、メロディをお客様に届けることを大切にされているイメージがあります。たとえば第3楽章の主部の終わり、チェロとコントラバスがメロディを奏でますが、コバケンさんはヴァイオラにもこのメロディを弾かせます。メロディをしっかりと届けるためのアレンジですね。ちなみにウルバンスキもこの変更をして、彼はさらにチェロを2パートに分け、片方に1オクターヴ低い音を弾かせました。

コバケンさんの音楽は、音のテンションの強さと、ピアノツシモの繊細さが求められます。強弱の幅が大きい、メリハリのある迫力満点の「新世界より」になることでしょう。どうぞお楽しみに！